

佐久大学における「2013年度アフリカ母子保健包括的看護管理JICA研修」実施報告

著者	弓削 美鈴, 橋本 佳美, 堀内 ふき, 宮地 文子, 高橋 智恵, 木下 珠希, 上原 明子
雑誌名	佐久大学看護研究雑誌
巻	6
号	1
ページ	47-52
発行年	2014-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1050/00000127/



活動報告

佐久大学における 「2013 年度アフリカ母子保健包括的 看護管理 JICA 研修」実施報告

The Working Report of “NURSING MANAGEMENT OF
MATERNAL AND CHILD HEALTH NURSING FOR AFRICAN
CONTRIES 2013” at Saku University

弓削 美鈴 橋本 佳美 堀内 ふき
宮地 文子 高橋 智恵 木下 珠希 上原 明子

Misuzu Yuge, Yoshimi Hashimoto, Fuki Horiuchi,
Fumiko Miyaji, Chie Takahashi, Tamaki Kinoshita, Akiko Uehara

キーワード：母子保健，アフリカ，研修，JICA，看護管理

Key words : Maternal and child health, Africa, Training program, JICA, Nursing management

I. はじめに

本学は「あらゆる健康レベルの個人、家族、地域、世界という視点から、対象者の環境と健康レベルに応じた看護を展開する能力を養う」というカリキュラムポリシーの基で看護人材教育を実施し、看護基礎教育に加えて国際的な看護人材教育についても本学の特性を活かして積極的な貢献に努力している。その一環としてこれまで、アジアやアフリカの様々な国の看護職が本学をベースに佐久地域で研修し、本学教職員や学生と有益な交流をしている。本年度は、JICA「アフリカ母子地域母子保健包括的看護管理」の研修の一環として、母子看護領域の教員が中心に、佐久

地域での研修プログラムの作成と実施に関わったので、その内容を報告する。

II. 研修内容

研修生は、アンゴラ、ガーナ、リベリア、ナイジェリア、シエラレオネ、ジンバブエ、ウガンダの7か国からの経験豊かな助産師であり、各国のこれからの母子保健を推進するリーダーとなる11名であった。各国の母子保健状況は、乳児死亡率は50～114（出生千対）、妊産婦死亡率は350～990（出生10万対）、保健施設分娩の割合は25～66%、成人の識字率は59～92%であり、開発途上国というばかりなく、内戦やHIVの蔓延等多くの課

受付日 2013年12月17日 受理日 2014年2月13日
佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

表1 JICAアフリカ母子保健包括的看護管理研修

週	内 容	場所
1	エビデンスに基づく看護	JICA 東京
	周産期新生児医学会新生児蘇生法	
	感染症・下痢・消化不良児への対処	
	日本の助産師教育	
	健康教育母親学級プログラム作成	
2	病院実習	東京 地区
	①総合母子保健センター愛育病院	
	②国立病院機構東京医療センター	
	③社会福祉法人聖母会聖母病院	
	④日本赤十字社医療センター	
3	助産院研修	関西 地区
	①大谷助産院	
	②ひなた助産新	
	③ひまわり助産院	
	④ふなき助産新	
	妊産婦ケア・妊産婦死亡率の改善方法 分娩管理における委託的知識と技法、分娩時の感 染管理、弛緩、産科危機的出血等の講義と演習	
4	保育園での母子福祉事業と保育園での幼児の生活	佐久 地域
	佐久総合病院にて地域医療システムの実際	
	学校保健の取り組み・学校給食	
	佐久市の健康づくり	
	母子保健事業 乳幼児健診	
	佐久大学の看護師養成の理念と特徴	
	母子の出産時の感染予防と乳幼児死亡率低下のため の出産時のケア	
	学内見学	
	助産学生との意見交換	
5	看護職を支える職能団体の活動・看護協会	東京 地区
	日本の助産師教育看護基礎教育の概要	
	看護大学生との交流	
	性教育	
	母乳育児推進について	
	看護職を支える職能団体の活動・助産師会	
	母子保健における災害時看護管理	

題を抱えた国々である。

研修の目的は、①地域保健を含む日本の母子保健医療システムを理解する、②母子保健における看護管理の知識・技術を習得する、③女性のライフサイクルを理解し継続的に展開される母子保健に関わるケア技術を習得する、④サマリーレポートを作成し、研修成果を自国のプロジェクトや職場改善に活用できる、であった。

研修期間とプログラムは表1に示したが、平成25年6月28日から8月2日までの5週間の研修の第4週目に、佐久地域の研修が実施された。

佐久大学教員がかかわった各プログラムについて報告する。

1. 佐久大学の教育の理念と特徴

大学の理念、カリキュラムの特徴、看護学

表 2 佐久大学アフリカ母子保健包括的看護管理JICA研修計画 (7月26日)

時間	内容	担当	その他 会場
9:30 ~11:15	挨拶・プログラム紹介 佐久大学看護学部の 教育理念とカリキュ ラムの特徴	堀内、弓削、橋本 堀内	司会 弓削 5号館1階会議室1. 2.
11:20 ~11:40	大学校内見学	堀内、弓削、橋本	基礎実習室、食堂、図書館、 コンピューター室
11:40 ~13:00	昼休み (お弁当持参)		5号館1階会議室1. 2.
12:30 ~13:00	お茶会 抹茶を立てる	岩崎、堀内、 弓削、橋本	5号館3階講師控え室
13:00 ~14:25	母子の出産時の感染 予防と乳児死亡率低 下のための出生時の ケア (講義と演習)	講義と演習: 弓削、橋本 演習補助: 高橋、上原	母性・小児実習室
14:40 ~16:00	アフリカの母子保健 情報の発表をうけて 意見交換 バーナ交換	宮地、堀内、弓削、 橋本、木下、高橋、 上原 別科助産専攻学生 16 名	司会 弓削 母性・小児実習室
写真撮影 内田			



写真 1 佐久大学の看護師養成の理念と特徴

実習、特にチューター制を用いた学生支援や導入基礎演習のPBL等の取り組みについて講義した。また、大学教育に係る学費について説明した。

研修生からは、留年した学生の支援方法、学費や奨学金等経済面に注目した質問が多か

った。

2. 大学案内

5号館2階の基礎実習室、食堂、図書館、コンピューター室を案内した。

基礎実習室のベットの数や広さ、さらにファントム人形をみて、「素晴らしい」の連呼であった。演習室で乾燥させていた氷嚢やイルリガートルをとり、何に使うのかと演習物品について質問があった。

食堂では出会った学生に気さくに声をかけ交流した。短時間の見学であり、研修生の興味の視点がそれぞれ異なり、次の見学場所への移動が困難であった。

3. お茶のお点前

日本文化のおもてなしとして、緋毛氈、傘、



写真2 お点前での日本文化交流

結界、茶釜等を準備し、講師控室をお茶室として造り、お茶会を開催した。和菓子は「ひまわり」「うちわ」を準備した。研修生はお点前の動作一つ一つについて説明をうけ、熱心に見聞き入っていた。実際のお抹茶は苦手の人が多く、2杯目を所望される人は誰もいなかったが、笑いがたえない和やかな会となった。

4. 母子保健向上にむけての講義と演習

アフリカでの妊産婦死亡の原因として最も高い出血、感染症、分娩停止の中で、医療機器の少ない分娩の場で、助産師としてできることは何かについて講義をした。双手子宮圧迫法、子宮強陰タンポン、乳頭マッサージ、輪状マッサージの方法、また、東日本大震災後に分娩室に準備されるようになった手動の吸引分娩器の取り扱いについて説明した。

小さく生まれた子どもの看護として、出生時の新生児の体温低下の機序とその対策について、かつて寒冷地佐久で行われていたコタツを利用した保温方法を説明した。

2つの講義の後に、リアルパンツを装着した妊婦役、分娩介助者の協力を得て、分娩台で感染予防と止血方法と吸引分娩の実際の技術演習を行った。

研修生は熱心到手技に注目し学習していた。演習時間はわずかであったが、輪状マッサージは母国でも実際に行われていた、また、乳頭マッサージは行われていないことが



写真3 母子の出産時の感染予防と乳幼児死亡低下のための出産時ケア



写真4 母子の出産時の感染予防と乳幼児死亡低下のための出産時ケア

分かった。吸引分娩の介助は実際に行っていると話していた人もいたが、お互いに吸引カップの装着部位については確認しあっていた。コタツを利用した新生児の保温については、コタツ布団を持ち上げてその機能について確認していた。リアツパンツには大変興味をもったようで、母国での教材にどうかと提案したところ、熱心に触れ、自身のカメラに収めていた。

5. 助産専攻科学生との交流

別科助産専攻の学生（以下助産科学生）16名は、科目名「国際化と助産師」1単位15時間の授業の一環として参加した。

助産科学生はプログラム参加前に、「世界の母子保健の現状」、「日本の国際化の現状」について学習後、海外における助産師の活動の実際を海外協力隊で活動された講師の講義



写真5 助産科学生との意見交換

(ウズベキスタンの母子保健の現状について)と意見交換で学習を深めていた。さらに、アフリカ母子保健包括的看護管理JICAの研修生の国を含む、日本、先進国、開発途上国を15か国に分け、母子保健の現状について自己学習を行い、アフリカ研修生との交流会に臨んだ。

助産科学生からは、助産の実際として分娩体位について質問がなされた。日本と同じ碎石位であった。次に日本では子どもの虐待が問題となっているが、アフリカでは問題となることがあるのか虐待の現状について質問した。女性器の割礼(FGM)はまだまだ見られること、腹部を強打しての人工妊娠中絶の問題があることが研修生から報告された。

研修生からは、取扱い分娩数が多く、助産師数が少なくケアが行き届かない現状や薬品が不足し、妊婦の救命ができなかったことなど、厳しい周産期の環境が報告された。また、かつて日本でもみられていたジェンダー差別なのか父権主義的な医療界の問題なのか、医師との協働の困難さが報告された。日本の学生は様々な機器を現場で教えてもらえることが幸せだと言っていた。その背景として、医療機器が入っても、その機器を使ったことがない人が説明をしなければならず、十分に活用できていない現状があることも報告された。さらに、上司の看護管理者は下の看護者に、職場間で教えあう文化がなく、看護の質の向上が進まないことが報告された。



写真6 助産科学生との意見交換

最後に、助産科学生から研修生全員に佐久大学のバナーを渡した。(写真 集合写真)

助産科学生は、今回の交流会の学習成果を、後期の授業で「世界の母子保健のニーズ」についてまとめ学習を深めることを計画している。

6. 佐久市の健康づくり・母子保健と小海町の学校保健の視察

佐久市の健康づくり・母子保健の研修では、市の担当保健師から、1960年代に脳卒中死亡率が全国最多のレベルであった佐久市が、2011年に世界最高健康都市構想実現プランの策定を検討する現在に至るまでに、地域の保健補導員や医療機関の医師・看護師等専門職とともに取り組んだ地域の健康問題の改善に向けた活動について説明があった。続いて、乳児健診の視察で、母子健康手帳を活用した乳児のヘルス・チェックと保健指導と育児支援を意図した健診の運営、保健師・助産師・医師・栄養士・歯科衛生士・保育士等の専門職が実施している実際について理解が図られた。

小海町立小海小学校では養護教諭から、当小学校が2012年に日本学校保健会最優秀校表彰を受けた学校保健活動について説明があった。それは、当校が児童の「生活の健康づくりの習慣化」を目指して、当校と父兄・町民・保健等行政部門・医療機関が連携して取り組んだ活動であり、養護教諭と全校教員に

よる健康生活習慣づくりの指導、学校歯科医による全校歯科指導、養護教諭の指導によって児童が実施した“からだと健康”に関する自作劇と保護者・地域への発表会、学校健診等による児童の健康状態の評価に関するスライドや養護教諭が作成した教材の紹介であった。学校栄養士による学校給食に関しては、国や町の学校給食に関する方針、現在の食育の課題と取り組みに関する説明を受けた。研修生からは日本の学校給食のシステム、保健室の運営、学校保健の取り組み方について積極的な質問と意見交換がなされた。小海小学校の給食は、全校児童と一緒に食堂で食べ、健康づくりの学習の機会にもしている。当日は研修生も児童と一緒にあって、昔の町民の代表的な献立による給食と会話を楽しんだ。

当日は、全学級の時間割に児童と研修生との国際交流が設けられ、クラスごとに日本の子どもの遊びを研修生に伝える工夫があり、児童も教員も研修生も全員が異文化の交流を心から楽しんでいた。

小海小学校の教職員や同席した町の関係者たちは、これから研究生達が自国で取り組む母子保健・学校保健の課題を理解し、それに立ち向かう彼らの熱意に対して、大きな期待とエールを送っていた。

Ⅲ. まとめ

本研修は、JICAにおける3年間の新プログラムの初年度であった。本大学で教員が担

当したプログラムが、他の大阪地区でのプログラムと重複した内容となり、その調整は今後の課題となった。研修の時期が前期試験前日や看護総合実習最終日となり、参加をうながすポスターも掲示したが、学部生の主体的な参加はなく残念であった。実施時期の検討が必要であった。

今回の研修は、5月末急遽受け入れを決定したことから、佐久地域研修計画の作成は、研修の受け入れ先との調整に重点がおかれ、アフリカ研修生及び助産科学生からの研修プログラム評価の準備が整っていなかった。今後、より効果的なプログラムとするために、評価の準備を含めた計画を整えていきたい。

文献

- 母子衛生研究会 (2013). 母子保健の主なる統計 (平成24年度). 東京: 母子保健事業団.
- 永井真理, 後藤美穂, 松本安代, 他 (2010). 仏語圏アフリカ諸国を対象とした母子保健研修集団研修の経験から効果的な研修のあり方を考える (1)—発言記録を利用した研修モニタリング・評価. *Journal of International Health*, 25(1), 47-57.
- 瀧澤郁雄 (2012). アフリカにおける保健開発: 健康水準の加速的改善と日本の開発援助への提言. *Journal of International Health*, 27(1), 27-45.
- UNFPA (2012). 世界人口白書2012. 東京: 公益法人ジョイセフ.